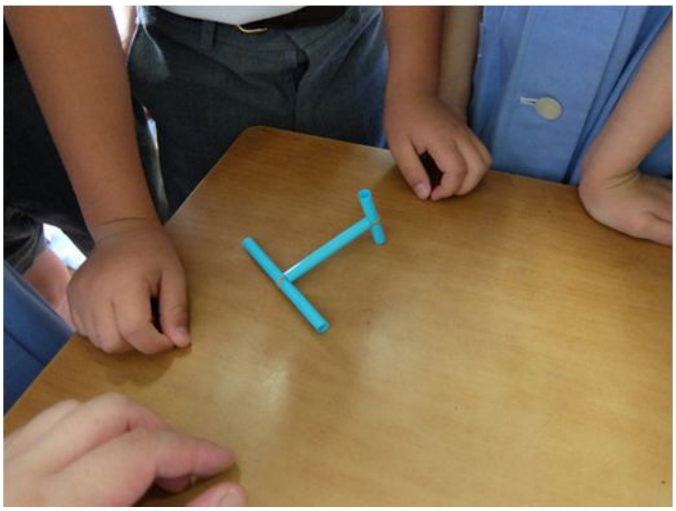
「日々の理科」（第 721 号） 2016（H28),-6,27

「輪ゴムのハルキゲニア」

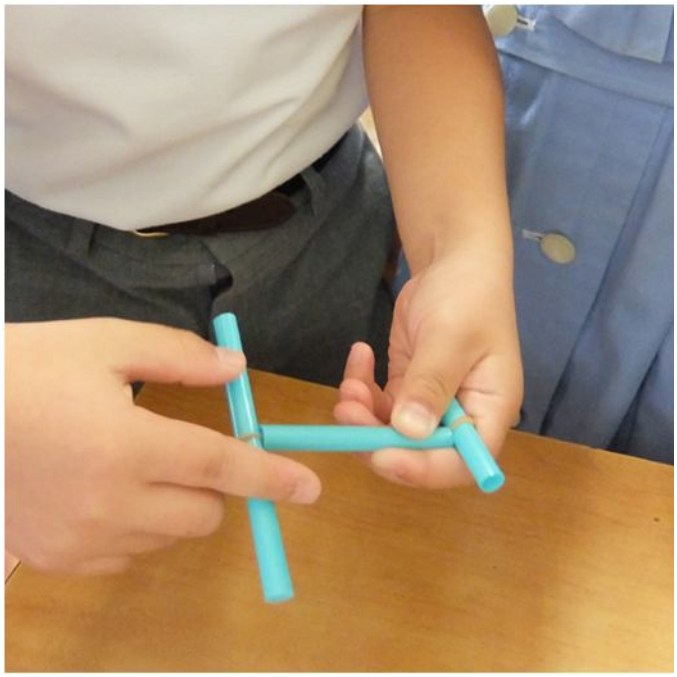
お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

輪ゴムの性質を利用したおもちゃは、実にバリエーションに富んでいて、子どもの数だけ可能性がありそうだ。基本的には「ゴムはひっぱると伸びて、離すともとの形・大きさに戻ろうとする」という性質を利用する。しかし子どもは、輪ゴムを張って弾くと、いろいろな音が出るという性質にも、大いに興味を示す。かつて教科書にもあった「モノコード」を思い出す。

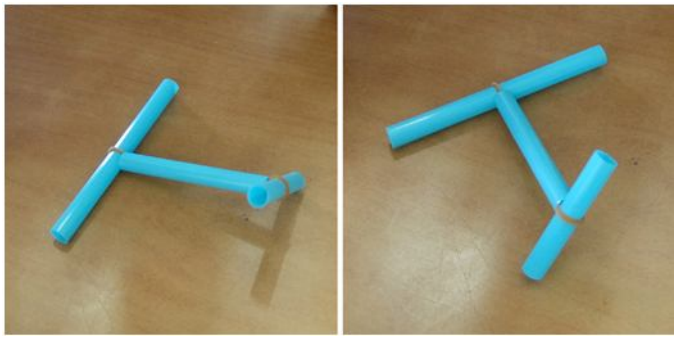
最初は耳元で輪ゴムを弾いて、いろいろな高さの音を楽しんでいるが、そのうち「楽器」を作りだす。写真は自作の「輪ゴムギター」を誇らしげに演奏する男の子である。「チーリップ」を演奏していた。



しかし、この日の一番人気は、この奇妙な「生き物」だった。短く切ったストロー（３本）と輪ゴム１本を組み合わせただけの、実に単純な工作だが、これが実にユーモラスな動きをする。



まず、一方を押さえて、もう一方を回す。輪ゴムを回すことで、回転エネルギーを蓄積しているのだ。両端の輪ゴムは、一方が長く一方が短い。この長さの違いが、面白い動きをつくりだす。



机上に置いて手を離すと、すぐに動き出す。長い方はそのままで、短いほうが一方向に回転する。それもプロペラのように速い動きではなく、２秒で１回転程度の、ごくゆったりとした動きだ。

非常に単純な動きなのだが、ゆっくりで一方向に歩くので、何か意志を持った生き物のようにも見える。誰かが「ハルキゲニア」というあだ名をつけた。「ハルキゲニア *Hallucigenia* 」というのは、古生代カンブリア紀に生息した生物だが、足の本数が多く、この輪ゴムおもちゃとは全く似ていない。しかし歩き方を想像したのだろう。気持ちはよくわかる。いや、これは面白い。教科書に載せても良さそうだ。